

古田史学の会・東海

平成30年

東海の古代

第210号 2018年2月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
編集 : 石田敬一 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

倭の五王 - 『宋書』の倭國 - その10

名古屋市 石田敬一

18代反正天皇の宮や陵に関する記事として、『古事記』に「弟、水齒別命、坐多治比之柴垣宮、治天下也。」「御陵在毛受野也」、書紀に「天皇、初生于淡路宮」「冬十月、都於河内丹比、是謂柴籬宮」とあります。

これらの記紀の記事から、反正は「淡路宮」で生まれ、「河内丹比」を都として「柴垣宮」又は「柴籬宮」にいました。そして御陵は「毛受野」にあるということになります。「毛受野」の御陵については「履中」の項（「東海の古代」209号）で述べたとおり、遠賀川流域の「百舌鳥原」の地名がある香春町のあたりと推定しました。

さて、淡路宮について、『古事記』のト部家系本にある「故、其伊邪那岐大御神者、坐淡路之多賀也」や、書紀の「伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是、以構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者矣」を重視し、淡路宮は淡路島（兵庫県淡路市多賀）にある伊弉諾神宮とする説が主流です。

ところが、仁徳紀にある「淡路嶋」は、仁徳記では「於是天皇、戀其黒日賣、欺大后曰欲見淡道嶋。而、幸行之時、坐淡道嶋、遙望歌曰、淤志弓流夜 那爾波能佐岐用伊傳多知弓・・・・」で「淡道嶋」となっています。『古事記』の国生み神話でも「淡道之穗之狹別島」とあります。淡道嶋については、仁徳の歌では「淡道嶋に座して」と説明があり、歌の内容では「難波の崎よ出で立ちて」とあって、難波の崎は荒津と考えられますので、先に荒津とそれに繋がる狭い道のような地形全てをあわせて淡道嶋ではないかと示唆したところです。

福岡市の西公園のあたりが荒津で、私が淡道ではないかと示唆した場所、その狭い道のような地形のところは、実は現在「百道」の地名が付けられており、西公園から西方へヤフオクドームや福岡タワーを通りさらには早良区役所辺りまで「百道」となっており、ここを往来する人々の足跡が東西縦横に交差することから「百道」と呼ばれ、かつては「百路原」とも呼ばれたところです。まさに人が行き来する「道」であ

ったのです。

したがって、「淡道」とは、この「百道」のことを指すのではないかと考えます。



また、『古事記』の真福寺本には先述の「**故、其伊耶那岐大神者、坐淡海之多賀也**」とあり、イザナギは淡海之多賀に座すとされます。私は、卜部家系本より古い写本である、最古の写本、真福寺本の記述を重視すべきと思います。

この「淡海」を「近江」の地名にすり替え、さらにその近江にある多賀と捉えて滋賀県犬上郡多賀町の多賀大社とする説もありますが、この地名をすり替えて比定する方法には疑問があります。

卜部家系本の「**淡路**之多賀」や書紀の「**淡路**之洲」に対して、最古の『古事記』写本である真福寺本では「**淡海**之多賀」であり、淡海は、淡い色の浅瀬の海を指すと思われます。博多湾は現在でも水深23mの浅い海で、古くは入り江が現在の博多湾より随分と内陸部まであったとされますので、当然ながら浅い海であったことは間違いのないでしょう。この浅くて淡い色の海を「淡海」と呼んだのではないのでしょうか。

また、「多賀」は、「百道」より南にある福岡市南区多賀1丁目の「多賀」であろうと思われます。この多賀は、現在の高宮浄水場（水上公園）のあたりにあった、かつての高宮八幡宮のすぐ東に、現在も地名が残っています。

現・高宮八幡宮にも古宮の跡があったとされますので、伊耶那岐大神が座していた「淡海之多賀」は、現・高宮八幡宮か、若しくは旧・高宮八幡宮（高宮浄水場）か、それともその付近の高台である高宮南緑地の貝島別荘辺りではないかと思われます。

これに対して、福岡県北九州市門司区にある淡島神社あわしまじんじや若しくは福津市宮司元町の奥之宮淡島神社あわしまとする説もありますが、いずれにしても宮の名は「淡路」であって「淡島」と記述されているのではありませんから、淡島神社を淡路宮にするのは違和感があります。

さて、先述のとおり、「淡路」が「**淡海**」であれば、必然的に**淡路宮は淡海宮**であろうと思います。淡路宮は淡路島にあったのではなく、淡海である博多の入り江にあった宮であろうと思います。私の考えと同様に『筑前国風土記』を編纂した貝原益軒

は、記紀に記された神代の事は筑前を中心とした話であるという説を唱えています。

通説では『古事記』の写本のト部家系本の「淡路」を採用しますが、最古の写本である真福寺本によれば「淡路」は「淡海」であり、その「淡海」は筑前・博多湾岸であると示してきました。

続けて、反正の淡海宮が博多湾岸にあったことについて、さらに確認するため、『万葉集』の歌から「淡海」を探ります。

『万葉集』には、「淡海」のフレーズが含まれた注目すべき歌があります。

相坂乎 打出而見者 淡海之海 白木綿花尔 浪立渡 (3238番)

相坂を打ち出でて見れば、淡海の海、白木綿花に浪立ちわたる

冒頭の「相坂を打ち出でて見れば」の「相坂」は、北九州市にある地名です。

福岡県北九州市の八幡西区本城にある交差点名「本城（相坂）」や北九州市営バスのバス停「相坂」、さらには「相坂古墳」として地名が残っています。また企業やマンションの名称にも「相坂」が使われており、この地域が「相坂」と呼ばれていたことは間違いがありません。

以前には大字本城字相坂であり、その前には本城村内の地名であったと思われます。



この「相坂」の地名は、兵庫県姫路市香寺町相坂や青森県十和田市相坂などにもあります。しかし、兵庫県の相坂は瀬戸内海側で、後述する「波の花」とは関係が薄く、また、青森県の相坂は、県内の種差海岸^{たねさし}で「波の花」が見られるものの「淡海」と関係がなく、いずれも、この歌が詠われた地域とはいえないと思います。

北九州市の相坂には、相坂古墳にみられるように少なくとも古墳時代には人が定住しており、遠賀川流域は古くは海岸が南の方まであったとされますので、相坂は、その入り江にあった津と思われます。

この歌の「打ち出でて」とは、広々とした所に出る意味や、出発することを意味しますから、歌の冒頭の意味するところは、北九州市の相坂の港から出航し広々とした玄界灘の海原に出て見渡すということでしょう。

そして、「白木綿^{しらゆうめん}」とは、白い木綿^{もめん}のことで、「白木綿花^{しらゆうぼな}」は、白木綿を花に見立て、波や水の白さのたとえとして用いられます。その白い花のような波が「浪立つ」というのは、まさに、先に示した泡のような「波の花」の現象ことでしょうから、淡海の海に波が白い花のように泡立っている様子を表現した歌ではないかと思います。

冬の志賀島では「波の花」が見られ、この「淡海之海」は博多湾岸の海を指していると思われます。

穂積朝臣老の歌一首には、「白波」が「志賀の大津」の地名とともに出てきます。

吾命之 眞幸有者 亦毛將見 志賀乃大津爾 縁流白波 (288番)

吾れ召しし まさきくあれば またも見む 志賀の大津に よせる白波

(読みは、ブログ「万葉集のつまみ食い36」<https://ameblo.jp/hashimotomasa/entry-12336513046.html>を参考にしました。)

私を召すよう命じられましたが、無事に着ければ、志賀の大津に寄せる白波をまた見られるでしょうという意味であろうと思います。通説ではこの歌の「志賀乃大津」の志賀を滋賀県として琵琶湖にある大津とされます。これに対して、私は「滋賀」ではなくその文字のとおり、「志賀」は、博多湾岸の志賀であって、その志賀にある大津だと思っています。博多湾岸の志賀の海岸であるからこそ「白波」です。琵琶湖では「さざなみ」はあっても「白波」はよほどの強風でないと無理でしょう。

したがって、この「白波」が見られるのは、琵琶湖ではなく、博多湾岸の志賀の大津のほうが可能性が高いと考えます。

また『筑前国風土記』逸文には、資珂嶋（志賀島）について「昔時、氣長足姫（神功皇后）の尊、新羅に幸でましし時、御船夜時にてこの嶋に來り泊りけり」とあり、博多湾岸の志賀島には新羅に行く船団が寄港できるほど、大きな港「大津」があったことをうかがわせますので、歌の叙景は博多湾岸に相応しいでしょう。

さらに「志賀」が、博多湾岸の志賀であると、はっきりわかる歌があります。

『万葉集』卷十六に「筑前国志賀の白水郎の歌十首」と題する中の歌のひとつである、三八六三番に「志賀の海人」がうたわれています。

荒雄良我 去尔之日從 志賀乃安麻乃 大浦田沼者 不樂有哉 (3863番)

新雄らが行きにし日より志賀の海人の大浦田沼はさぶしくもあるか

(『万葉集』全訳注原文付(四)、校注者中西進、講談社、50頁)

この講談社の『万葉集』では、「志賀乃安麻」を「志賀の海人^{あま}」と読んでいますが、表題が「筑前国志賀の白水郎の歌十首^{あま}」ですから、本来は「志賀の白水郎^{あま}」とすべきではないかと思います。

「筑前国志賀の白水郎の歌十首^{あま}」の三八六〇番から三八六九番の歌に続いて歌の説明が付されています。対馬国への食糧輸送船の舵師として、筑前国の「津屋郡志賀村^{あま}

の**白水郎荒雄**」がでできます。「白水」は中国の地名で、そこに潜水が上手い者がいたことで「白水郎」は漁師や海人を意味します。したがって「白水郎」の名称は、とりわけ潜水が上手い漁師や海人であろうと思います。玄界灘に面したところに志賀の皇神の志賀海神社があり、志賀島は古くから海人族の首長である阿曇一族が支配していたことから、「志賀の海人」「志賀津」「白水郎」といえば、それは、筑前の志賀の可能性が高いと考えます。

『万葉集』巻七には「浪」とともに九州の志賀津の白水郎^{あま}をうたった歌があります。
神楽浪之 思我津乃白水郎者 吾無二 潜者莫為 浪雖不立 (1253番)
神楽浪の 思我津の白水郎は 吾れなしに 潜きはなせそ 浪立たずとも

一二五三番の「白水郎」は、「九州の海人」のことですので、「思我津」は、九州・博多の志賀の港です。「(九州・博多の) **志賀の入り江の海人よ、私を差し置いて潜らないように、浪が立たないとしても**」という意味であろうと思います。「浪が立たないとしても」は、逆に「浪」がまれではない地域であるという裏返しでしょう。

したがって、この歌は、琵琶湖の志賀の歌ではなく、博多湾岸の志賀の歌で間違いないと思います。つまり、この歌においても博多湾岸の「志賀」と「浪」は強く結びついています。

「神楽浪」とは、通説では琵琶湖の地名とされる「志賀」の枕詞とされ「さざなみ」と読まれます。しかし単に枕詞ではすまされないように思います。

『広辞苑』第四版（1991年）では、「さざなみ」について、次のとおり記されています。

さざなみ【細波・小波・漣】（古くは清音）①細かに立つ波。さざれなみ。②琵琶湖の南西岸地方、また近江国の古名。細浪。楽浪。

一・の【細波の】①「滋賀」「大津」「長等」「比良」など近江国の地名に冠して枕詞のように用いる。②（波が寄ることから）「寄る」「夜」と続けて枕詞のように用いる。

『広辞苑』第七版（2018年）では、第四版と比較すると、「さざなみ」の項の②に**「神楽浪。神楽声浪。」**が追記されています。したがって、比較的新しい『広辞苑』に従えば、「神楽浪」は「さざなみ」と読むことになりますが、古い『広辞苑』にはなかったということです。

確かに、記紀にも「さざなみ」は出てきます。仲哀記には「沙沙那美（さざなみ）」とあり、神功皇后紀には「狭々浪」があります。しかし、「神楽浪」とは記されていません。

故、逃退逢坂、對立亦戰。爾迫迫敗於沙沙那美、悉斬其軍（仲哀記）

故に逃れて逢坂に退き対立し亦た戦う。しかりて沙沙那美にて追い迫り、悉く其の軍を斬る。

軍衆走之、及于狭々浪栗林而多斬（神功皇后紀）

軍衆、これへ走りて狭々浪の栗林で多くを斬る。

また、『採輯諸国風土記』(狩谷掖斎著、木村正辞補遺、日本古典全集刊行会、昭和4年、永続的識別子info:ndljp/pid/1024920)には、次のとおりあります。

近江國 補遺の部 細浪國

淡海國者。以二淡海一為二国號一。故一名云二細浪國一。

所三以目前向二觀測上之漣【^漪 ^力 ^辛】一也。陀山石所引浅井家記録。

(校異)考証は神樂綾入引浅井家記録として載せたり。(近江國風土記を引キ云)と云ふ事を頭に加ふ。末。漣漪也とあり。

淡海の國は、淡海を以て國の號と為す。故れ一名を細浪の國と云ふ。目の前に湖上の漣漪を向觀る所以なり。

始めに『採輯諸国風土記』の記事における語句などについて注意すべきことを書き留めます。まず【^漪 ^力 ^辛】の文字には「漪力」として、注釈が付けられています。それは浅井家の記録に「漣漪」とあるからとあります。「漣漪」の「漣」も「漪」もそれぞれ1文字で「さざなみ」と読みますが、2文字で「さざなみ」と読ませるようです。この浅井家とは、浅井長政で有名な北近江の氏族です。浅井家には『近江國風土記』の記録が残っていたのでしょうか。

また、『採輯諸国風土記』の著者である狩谷掖斎(1775-1835年)は、江戸時代後期の考証学者、書誌学者であり、古文書を収集し、これを記していると思います。ただ、この江戸時代後期には既に『近江國風土記』はありませんので、ここでは「近江國風土記を引いて云う」とされます。近江國の別名を細浪國とする根拠は、この『採輯諸国風土記』の記事にもたれていますが、『採輯諸国風土記』にも、やはり「神樂浪」を「さざなみ」と読む証拠はありません。

ある説では、「神樂浪」を「さざなみ」と読ませたのは、神樂の囃子詞が「ささ」ということから、「神樂声」を「ささ」と訓ませ、それから「神樂声浪」を「ささなみ」と読ませ、これを省略して「神樂波」や、「神」を省略した「樂浪」も「ささなみ」と読ませているとされます。

しかし、この説明は疑問です。

というのも「神樂浪」が頭に付くのは「志賀」など近江の地名だけではなく、次のとおり、近江の地名や海と全く関係が無い「大山守」の頭に「神樂浪」が付されているからです。次の歌がそれです。

神樂浪乃 大山守者 為誰<可> 山尔標結 君毛不有國 (154番)
神樂浪の 大山守は 誰がためか 山に標結ふ 君もあらなくに

一五四番の歌では「大山守は、誰のために標繩を張ってお守りするのでしょうか。君はもういらっしゃらないのに。」という意味であって、この歌の背景は山に関連しています。したがって「神樂浪」を「さざなみ」と読むのは疑問です。

「筑前国志賀の白水郎の歌十首」には、三八六二番に「志賀の山」に関する歌があります。

志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見つつ偲はむ (3862番)

筑前国の歌の中に「志賀の山」の歌があるとなると、一二五三番の歌で枕詞とされた「神楽浪」は、琵琶湖の近江ではなく博多湾岸をさすのではないかと思います。つまり「**神楽浪の思我津の白水郎**」は「**博多湾岸の志賀津の海人**」です。

これらの歌にある「志賀」については、通説の近畿を中心とした歌ではなく、北部九州、博多湾岸を背景にして詠われたと考えたとき、私は歌の内容が良く理解できるように思います。

すなわち、「淡海之海」は、博多であって、反正が生まれた「淡海宮」は博多湾岸にあった可能性が高いと考えます。

次に、反正の都について検討します。

反正の都は、『日本書紀』に「**河内丹比**」とあります。

また、宮については、記紀に「**柴籬宮**」又は「**多治比之柴垣宮**」とあります。

都於河内丹比、是謂柴籬宮。(反正紀)

弟、水齒別命、坐多治比之柴垣宮、治天下也。(反正記)

通説では、反正の宮を大阪府松原市上田にある柴籬神社に比定しています。松原市は、河内國丹比郡内にあった市とされ、記紀の記事の地名に合致しています。また、柴籬神社の南門に、「反正天皇柴籬宮址 昭和十九年一月 大阪府建立」の石碑があり、西鳥居前にも「丹比柴籬宮址 大正八年 大阪府」の石碑が建てられており、伝承地として有力な候補地となっています。

ただ、いずれの石碑も昭和や大正時代に設置されたもので、ここに反正の柴籬宮があった証拠にはなりません。

また柴籬神社は、丹比柴籬宮伝承地(上田7丁目)の跡に建てられたもので、都や宮の存在の遺構が見つかって建てられているわけではありませんので、考古学上の証拠もありません。

もともと反正の名である「**丹比**」や「**多治比**」の名は「**多遲花**」に起因するもので、大阪府の伝承地は、これについてまったく無視されているようです。

於是有井曰瑞井、則汲之洗太子、時多遲花有于井中、因爲太子名也。多遲花者今虎杖花也、故稱謂多遲比瑞齒別天皇。(反正紀)

反正の名の由來說話にあるとおり、「**多遲花**」は博多湾岸と大いに関連があります。

この反正紀の記事では、多遲比瑞齒別皇子(反正)を洗ったときに井戸の中に「**多遲花**」があったため太子の名を多遲比瑞齒別尊と称したとされます。そして、これまで履中の記事に関連して述べてきたように、太子であった履中が筑紫の**難波宮**から逃げ、泥酔から覚めた「**多遲比野**」の地名も、反正である**多遲比**瑞齒別の名と同じであり、多遲比野も「**多遲花**」に起因すると思われます。

つまり、多遲花と多遲比は大いに関連しています。

博多の東には多遲花の名が付く立花山があります。イザナミ・イザナギを祀る「二神山」として「ふたかみやま」とも呼ばれています。

また、イザナギが禊をした場所については『古事記』に「**竺紫日向之橘小門之阿波岐**」とあり『日本書紀』では「**筑紫日向小戸橘之櫛原**」とあります。この禊ぎの場所も後述のとおり博多湾岸の小戸大神宮があるところです。

禊をした場所について、記紀では「**竺紫日向**」や「**筑紫日向**」とします。(以下「竺紫」と「筑紫」を合わせて「筑紫」と記す。)

この禊ぎの場所の「筑紫」を九州全体と捉え、「日向」を南九州に比定する説が主流ですが、これは全く違うと思います。というのも、『古事記』においては、「**筑紫嶋**」と「筑紫」「筑紫國」がしっかり書き分けられています。また、神代**紀**においても、「**筑紫州**」と「筑紫」等とが書き分けられています。イザナギが禊をした場所については記紀共に、九州全体を指す「筑紫嶋」や「筑紫州」とは記述されていません。

もし、九州全体を示そうとすれば、「筑紫州日向」や「筑紫島日向」と記されるに違いありません。しかし、そのようには記されていませんから、この「筑紫日向」の「筑紫」は、九州全体を指すとは思えません。

また、古代の倭國は朝鮮半島と九州にまたがる海峡国家であって、イザナミ・イザナギの時代に、南九州まで倭國であったか不確かです。したがって、この「筑紫日向」の「筑紫」を九州全体と捉え、「日向」を南九州にあててのではなく「筑紫日向」の「筑紫」は北部九州と捉えるべきでしょう。

この「筑紫日向」は、福岡県福岡市と糸島市の境に位置する高祖山（標高416m）^{たかすやま}近辺の日向峠や日向川があるところを指すと思います。天孫降臨の地についても「**竺紫日向之高千穂之久士布流多氣**」とありますが、「クシフル山（櫛触山）」は、この高祖山の南に連なる高千穂にあります。^{ひゅうが}したがって、この「日向」は、宮崎県の日向ではなく、福岡県の日向です。

この「日向」を宮崎県の日向に歪めてしまった犯人は本居宣長にあります。

本居宣長は、邪馬台国は九州南部の熊襲説です。

本居は、神武東進の出発地について宮崎の日向國であるはずと考えており、ニニギの天孫降臨地である「日向」も宮崎の日向國に結びつけるために、筑紫は九州全土と決めつけざるを得なかったのです。「筑紫日向」から「筑紫」だけを抜き出して、それを九州全体のこととし「日向」を宮崎の日向國としてしまったのが間違いの始まりです。

さて、「**筑紫日向の橘小門の阿波岐**」の具体的な場所については、先に示した日向峠や日向川の近辺であって、橘という地名がある小門です。小門（小戸）とは、波で浸食され崩落してできた狭間とされます。弥生時代には旧志摩郡と旧怡土郡は今津湾から船越湾に至って分離された状況であり、この水路となった狭間が小門（小戸）です。

小戸大神宮（福岡市西区小戸2-6-1）は、その縁起によれば、神代の昔、伊邪那岐命が御禊祓の神事を行われた尊い地とされます。縁起のとおり禊ぎの場所です。この「**橘小門**」から立花山に至る範囲が「橘」に関連した地域であるのは間違いありません。そして、重要なことは、福岡の「橘」がイザナギが活躍した頃からの古い地名であるということです。

したがって、「橘」に関わる反正の都は、博多湾岸にあったと考えます。

『日本書紀』年表 5

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

本誌207号（平成29年11月号）で『日本書紀』年表四（継体紀～崇峻紀）を発表したが、引きつづいて『日本書紀』年表五（推古紀～齊明紀）を発表する。

今まで発表した表は次のとおりである。

- ① 『日本書紀』年表一（神代上・下）：「東海の古代」141号（平成24年5月）
- ② 『日本書紀』年表二（神武紀～応神紀）：「東海の古代」138号（平成24年2月）
- ③ 『日本書紀』年表三（仁徳紀～武烈紀）：「東海の古代」150号（平成25年2月）
- ④ 『日本書紀』年表四（継体紀～崇峻紀）：「東海の古代」207号（平成29年11月）

『日本書紀』年表五（推古紀～齊明紀）については、本会ホームページ「古田史学の会・東海」（http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai/index.htm）の「資料」に掲載されているので、必要に応じてダウンロードして下さい。

2 編集仕様

編集の仕様は、『日本書紀』年表四と同様である。

今回は、疑問・留意事項が多々あり、それらを明示した内容とした。

3 年表における疑問・留意事項

年表における疑問・留意事項の詳細については「解説」に記述しているが、その主たる概要は次のとおりである。

(1) 推古紀

- ① 暦法上の誤り、年号の誤り、記述の不整合など多々ある。
また、菓獵を行った日が干支では無く、五月五日と数字で記述されている。
- ② 推古十二年で制定した「冠位十二階」の順位は、『隋書』倭国伝及び三善清行が醍醐天皇に上奏した『革命勘文』での順位と異なる。
- ③ 裴世清は2度来日したと推定している。『日本書紀』は推古二十八年の唐時代の来日を十二年遡らせ、推古十六年の隋時代の来日と併せて記述している。
- ④ 近畿天皇家と新羅との初めての通交記事は、十年遡って記述されている。
- ⑤ 憲法十七条は皇太子（厩戸皇子）が作ったと記述されているが、推古天皇の詔を発する記事がなく不審である。

(2) 舒明紀

- ① 田村皇子（舒明天皇）は、彦人大兄皇子と糠手姫皇女の子と記述されている。
天皇の子ではないから「王」であるが、「皇子」としている記述されている。不審である。

息長足日広額天皇（舒明天皇） 淳中倉太珠敷天皇孫 彦人大兄皇子之子也
母曰糠手姫皇女（下線は筆者による。以下同じ）

- ② 唐・高表仁の来日については、『旧唐書』等の中国史書では、来日したが王と礼について争いになり、来日目的を果たせなかったと述べられている。

表仁無綏遠之才 與王子爭禮 不宣朝 命而還

『日本書紀』では、高表仁の来日目的地が九州王朝か近畿天皇家か判然としない記述となっている。

(3) 皇極・齊明紀

- ① 寶皇女（皇極天皇）は、茅渟王と吉備姫王の子として記述されている。天皇の子ではないのに皇女として記述されており、不審である。

天豊財重日〔重日此云“伊柯之比、”〕足姫天皇（皇極天皇）

渟中倉太珠敷天皇曾孫 押坂彦人大兄皇子孫 茅渟王女也 母曰吉備姫王

- ② 皇極天皇は、舒明皇后から天皇に即位したと記述されているが、皇后から天皇に即位するまでの経過は記述されていない。また、齊明天皇として即位する場合も、その経過が記述されていない。

- ③ 皇極天皇は、孝徳天皇に生前譲位した後、「皇祖母尊」と記述されている。天智六年二月条で、天豊財重日足姫（齊明天皇）を間人皇女（孝徳皇后）と合葬したとき、皇太子（天智天皇）は齊明天皇を「皇太后天皇」と述べている。

是日 以皇孫大田皇女 葬於陵前之墓 高麗・百濟・新羅、皆奉哀於御路

皇太子謂群臣曰「我奉皇太后天皇之所勅、憂恤萬民之故、不起石槨之役。所冀、永代以為鏡誠焉」

また、吉備姫王（皇極天皇の母）を「吉備嶋皇祖母命」、押坂彦人大兄皇子（皇極天皇の祖父）を細字で「皇祖大兄」と記述している。

称号の変遷をどのように理解するか。筆者は、齊明天皇は生前「皇太后天皇」と呼ばれていたと推定する。また、書紀編纂者は新たな王朝が始まったので、皇祖の母である皇極天皇を「皇祖母尊」と記述したと思われる。

天智三年六月条に記述されている「嶋皇祖母命」の解釈で、「吉備嶋皇祖母命」を指すか、別人かで2説ある。

- ④ 田眼皇女は、敏達天皇と額田部皇女（推古天皇）の子として生まれ、舒明天皇に嫁いだと敏達紀に記述されているが、舒明紀にはそのような記述はない。

それ故、寶皇女は当初「妃または夫人」として嫁ぎ、田眼皇女の上に皇后となったと筆者は推定している。

(4) 孝徳紀

- ① 輕皇子（孝徳天皇）は、皇極天皇と同母の弟と記述されているが、父の名前は記述されていない。『本朝皇胤紹運録』によれば寶皇女と同父である。すなわち、皇子でなく「王」である。不審である。

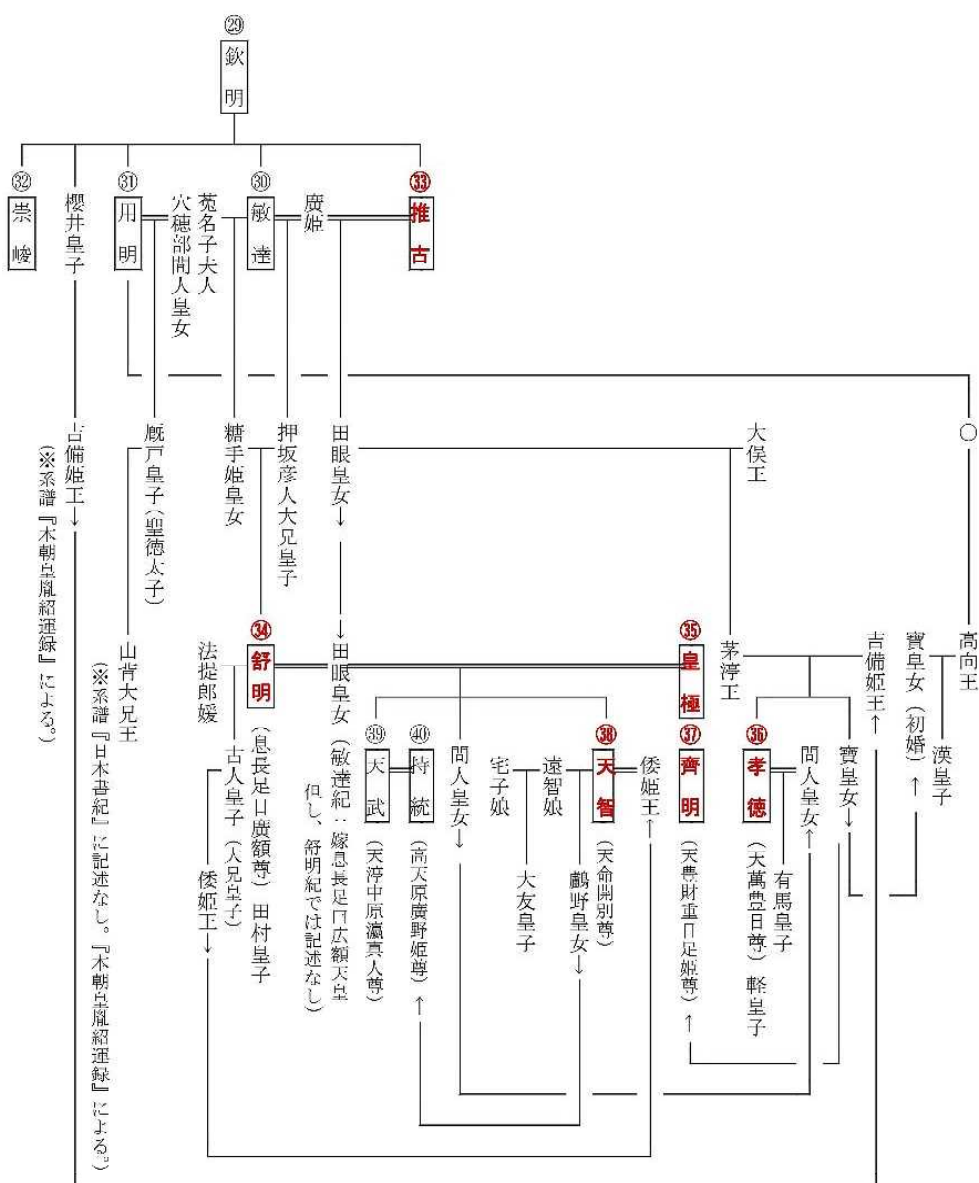
天萬豊日天皇（孝徳天皇） 天豊財重日足姫天皇（皇極天皇） 同母弟也

- ② 孝徳天皇は元日の賀正礼に参列している。それにはどのような意味があるのか興味あるところである。また、天智・天武・持統紀にも記述されているので、後日作成する『日本書紀』年表六(天智紀～持統紀)において解説する。

- ③ 「大化」と改元しているが、疑問が多々ある。一例として、改元であるのに改

④ 孝徳天皇の崩御年を「後五年」と記述しているが、その理由は不明である。

⑤ 孝徳天皇の葬儀記事の一部が欠落しており、欠落した記事は、持統紀に記述されていると正木裕氏が述べられている。卓見である。



天皇系譜（推古天皇、齊明天皇）

凡例		
……	—	＝
天皇以外の系譜	天皇系譜	
	妃等	皇后

天照大神の時代

一宮市 畑田 寿一

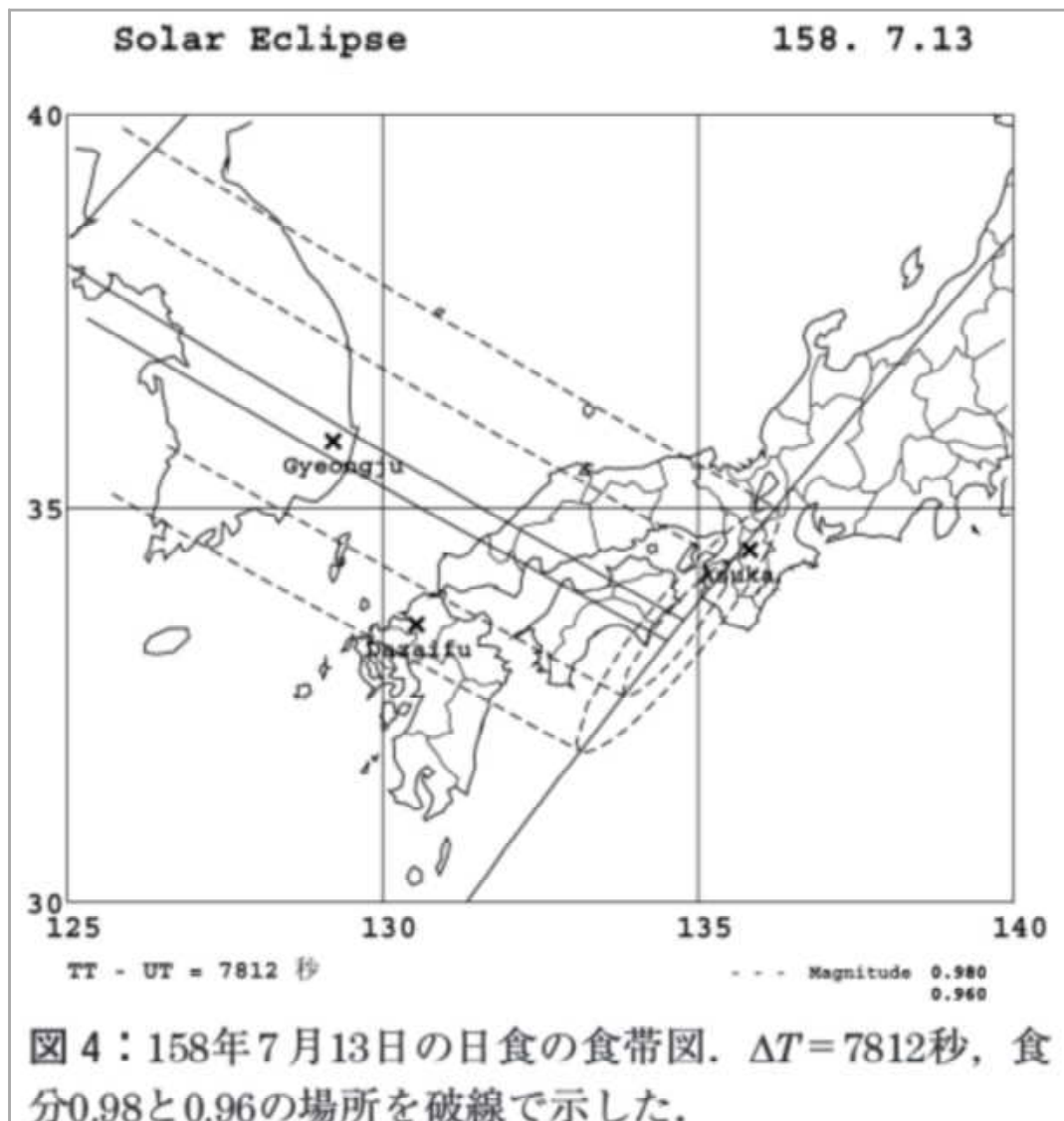
1 天の岩戸と日食

天照大神が天の岩戸に隠れると世の中が暗黒になる神話は、日食の時の状況によく似ており「天の岩戸日食」として広く知られている。この日食の時期である247年か248年が卑弥呼の没した時期と重なることから、天照＝卑弥呼＝邪馬台国近畿説と結びつけられて語られることが多かった。

2 「天の岩戸日食」の最近の研究

今世紀に入り、地球の自転の遅れが詳しく予測できるようになり、この遅れを補正値とした古代の日食の計算が試みられるようになった。国立天文台の研究誌『国立天文台報第13巻』（谷川清隆・相馬充著、2010年）の報告によると次のような計算結果が得られている。

日食食帯図



- ① 自転の遅れを積算すると、2世紀頃には地球は現在より約2時間程度進んでいた。
(この表現は分かりにくい、冬至に北斗七星を見ると30°程傾きが違っていた。)
- ② この結果、247年は日本では日食が観測されず、248年の日食は浅い部分食で辺りが暗くなる程ではなかった。
- ③ 「天の岩戸日食」は248年ではなく、1つ前の158年の日食の方が可能性として高く、朝鮮半島の「三国遺事」の「延鳥郎と細鳥女の説話」にそれらしい記述がある。
- ④ 158年の日食は四国の室戸岬の南東海上から始まり、朝鮮半島の慶州を通り朝鮮半島の根元付近の海上で終了する皆既日食となった。九州北部、近畿地方では部分食であったが、97%を越える食が発生し、辺りは暗闇に包まれた。
- ⑤ 日食は日没前に起こり、大宰府では少し復帰した状態では日没を迎えたが、大和では殆ど復帰しない状態で日没を迎えた。その結果「二度と太陽は現れないのではないか」と言う恐怖感を人々に与えるには十分な出来事であった。

3 天照大神期の世界の天候

一般には、1世紀から3世紀にかけて順次温暖化が進んだとする説が有力であるが、異を唱える説もある。甲元眞之氏は『気候変動と考古学』（熊本大学、2008年）でアメリカの年輪年代から紀元150年頃に寒冷期があったとしている。『後漢書』（台湾維基文庫）の恒帝（147～167年）期の記述を見ると大水や飢饉が数年に1度起きており、延熹九年（166年）に『・民多飢窮，又有水旱疾疫之困。・』（民の多くが餓えて苦しみ、水害・旱魃・疾病のために困り果てている）として救済策の詔を発している。異常気象は地球規模で起きており、アングリム島（オーストリアの東北のバヌアツ）で発生した大規模火山爆発（AD50年±100年）に関連があった可能性が高い。

この結果、民は暖かい地を求めて移動し、中国南部では追い出された民が島伝いに九州に上陸するほか、朝鮮半島からも大量の難民が日本列島に押し寄せたと思われる。日本列島に2世紀から3世紀初頭にかけて大規模な集落が各地に作られたことにも関連があるのではないかと。特に九州地方では人口過剰に陥り、後漢書巻85東夷伝では『恒・靈帝の間（147～189）に倭国が大いに乱れ、更相攻伐し、年を歴るも主無し。』と記述されており、倭国の当時の混乱状況が覗われる。

4 天照大神の故郷

南九州は158年には皆既日食は起きないので除外し、近畿も唐古・鍵遺跡しか無いので除外すると北九州が残る。その中で天照大神に関係のありそうな遺跡を探すと次の5箇所が候補に挙る。

(1) 平原遺跡

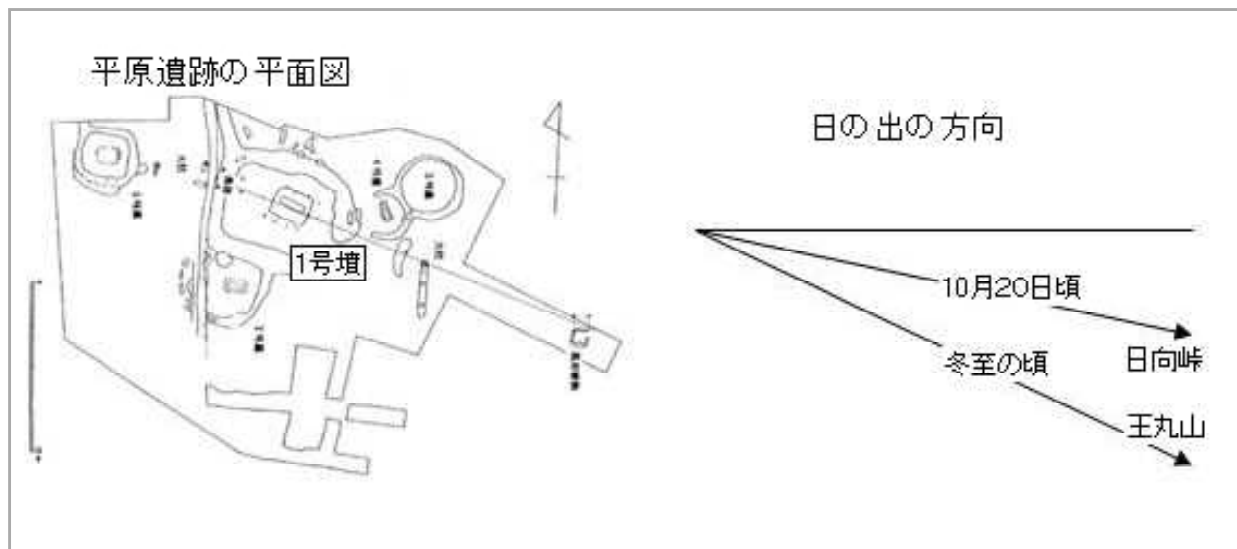
平原遺跡は糸島市の南方、日向峠の西の曽根遺跡群の中にある。その概要は次のとおりである。

- ① 中心の1号墳はガラスのピアス、メノウ製管玉、勾玉などが多数出土し、発掘を指揮した原田大六氏は、2世紀の女性の墓であったとしている。ただし、ピアスは晋代（265－316）の特徴を示しており、同様のものが朝鮮半島の江原道や

慶尚南道で出土している。

- ② 出土している「長宣子孫鏡」の年代をめぐって意見が分かれており、3世紀初頭とし、卑弥呼の墓とする説もある。
- ③ 特記すべきことは直径46.5cmの鏡が出土したことで、この値は周囲の長さが三種の神器の八咫鏡と同じ大きさになる。
- ④ また西側の大柱と3号墳付近の大柱を結ぶ線は1号墳の棺の側面を通り、稲の収穫の時期の10月20日頃に日向峠から朝日が昇り、新嘗祭や神嘗祭の原型であるとする説がある。
- ⑤ 被葬者の女性は西向きに埋葬されており、大柱の影が足元に当たることから女王の復活を意味する説がある。
- ⑥ この遺跡で最も古い墓は5号墳で1世紀まで遡ることができる。

平原遺跡の平面図（柳田康雄氏：邪馬台国の会第273回講演より）



以上の状況から地元では1号墳を卑弥呼の墓として、10月20日にイベントを催している。しかし、『魏志』倭人伝を信じれば、糸都国＝邪馬壹国は成り立たない。

この地方の冬至は南東30°から朝日が昇り、平原遺跡から見ると日向峠の南方の王丸山（453m）から昇る。10月20日では太陽の昇る方向と遺跡の配置方向が微妙にずれるが、冬至（12月20日頃）に1号墳の東端から見ると遺跡の配置方向が合致する。冬至の朝日は復活のシンボルとして伊勢神宮の内宮の五十鈴川に架かる宇治橋の方向が有名であるが、この方向を持つ古墳は各地にあり、この地は太陽信仰の原点であった。なお、注目すべきは同じ遺跡にある5号墳や2号墳は単に東に向いており、4号墳にいたっては北北西を向いている。冬至にこだわるようになったのは1号墳からであろう。

この状況から天照大神の墓に最も相応しいが、発掘調査が進むにつれて2世紀まで遡ることが困難になり、卑弥呼と同時代の女性の墓と考えるのが妥当であろう。

（２）三雲南小路遺跡

平原遺跡の南東 2 k m の地点に三雲南小路遺跡がある。遺跡は 2 世紀頃の成立で 1 号墳（男王）、2 号墳（女王）が隣り合って存在する。1 号墳からは銅剣、銅戈、銅鏡が出土し、2 号墳からはガラス垂飾、勾玉の他に連弧文「日光」銘鏡などを出土している。「日光」銘鏡には「**日の光現れば天下大いに明らかなり**」と記されており、太陽信仰を髣髴させる。被葬者の女性は東に顔を向けて埋葬されており、これも冬至における儀式を意識したものであろう。しかし、墓が仲良く並んでいるのを見ると、この地が女王国であったとは考えにくい。

（３）吉武高木遺跡

吉武遺跡は日向峠の東側にあり、九州では最も古くから集落があった地とされている。1 世紀前後が中心の遺跡であるが、大型建物や三種の神器が出土しており、天照大神の故郷として相応しいが証拠不十分である。

（４）須玖岡本 D 地点遺跡

須玖岡本 D 地点は出土品から男王の墓とされ、奴国の首都とされている。後漢の光武帝から貰った金印が出土した国でもあるが、天照大神との関係は見出しにくい。

（５）吉野ヶ里遺跡

時代、規模、位置からみて最も可能性が高い。しかし、遺跡の配置から先祖の墓の上に現れる北斗七星を信仰の対象としており、太陽神祀る天照とは異なると思われる。

以上、候補地を見てみるといずれの場所も決め手に欠ける。当時の政治体制は女性が巫女として占いを行い、男性が統治をする「姫彦統治」が中心で、各地に巫女は居た。糸島半島に存在する遺跡は伊勢神宮の諸行事に類似した点があり、この地が天照大神の故郷と考えられないか。

5 まとめ

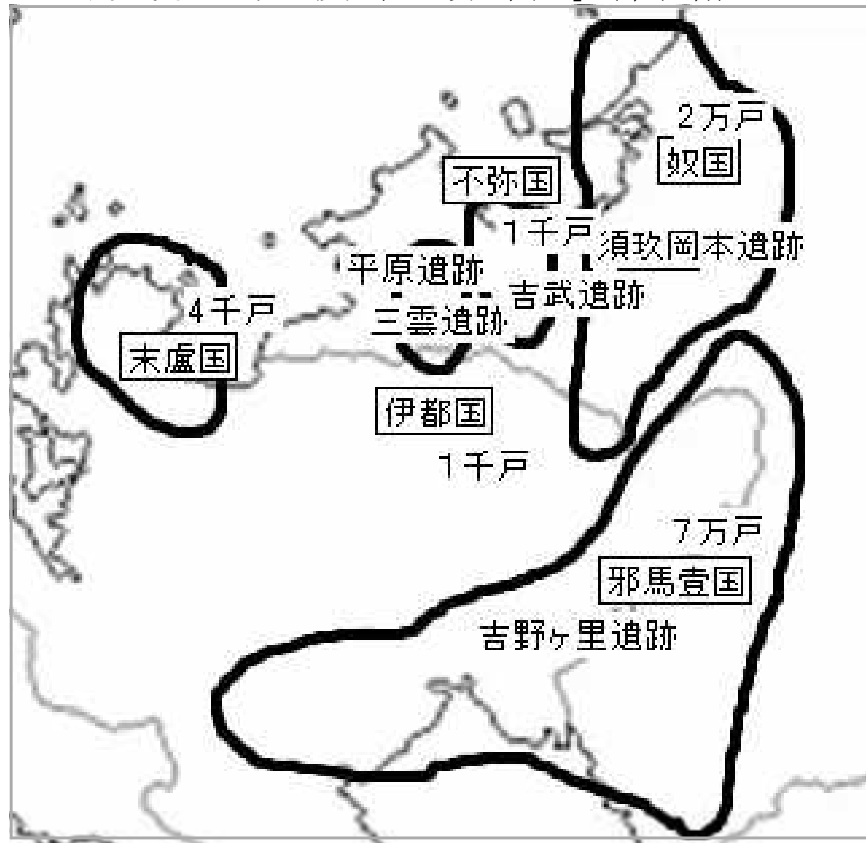
天照大神に関する国内の情報は皆無に等しく、中国の史書に頼らざるを得ないが、天文学、環境気象学などと組み合わせてみると朧げながら当時の姿が見えてくる。

天照大神の時代は激動の時代であり、天照大神は秩序の維持に全精力を注いだが騒乱を収めるまでには至らなかった。これがスサノウノミコトの神話に表わされている。

『魏志』倭人伝の記事から、国邑間の距離を短里とし国邑の規模を戸数で考えると、最も大きい国は邪馬壹国で全体の半分を占める。次に大きい国は奴国で、この 2 国で全体の 75% を占め、残りの 25% に小さな国がひしめきあっていたことになる。糸島半島の糸都国から他の国までは 100 里（8 k m）であり、隣の市に行く距離に国邑があった。3 世紀前半で既に過密状態であったことが窺われる。百年ほど遡る天照大神の時代では上記の遺跡が国邑の中心であったと考えられるが、北九州では新たな移民を受け入れる余地が少なく、東方への民の移動が続いたと考えられる。

日向地方に住んでいた神武天皇から見ると天照大神は太陽を蘇らせた女神であり、卑弥呼は百年以上続いた騒乱を鎮めた女神である。近畿に移住した天孫族は女神に対する畏敬の念から神話が生まれ、天照大神を主神とする信仰が生まれたのではないか。

九州地図 「魏志倭人伝の頃の国々」(筆者著) より



前回の例会の内容

■天武天皇は九州王朝の代理人

瀬戸市 林 伸禧

天武の嬪である尼子娘は、筑紫胸肩徳善の娘であることなどから天武は九州王朝出身ではないかとした。

■皇后系図から欠史八代の天皇の動向を探る

一宮市 畑田寿一

欠史八代の期間は100年足らずで10代の継承は無理であり、各地の豪族が実権を握り祭祀する大王を推奨したとした。

■倭の五王『宋書』の倭国一その9

名古屋市 石田敬一

天仲哀陵、応神陵は福岡県の長野川流域、仁徳陵は遠賀川流域の香春町の百舌鳥原辺りの未知の古墳形状を示唆した。

■ 投稿文の様式

- ・横書き。べた打ち。インデント無し。
- ・MS明朝 12ポイント。
- ・見出しのみMSゴシック。
- ・見出しは左寄、記号1、(1)、①の順。
- ・図書は『』で発行所・発行年を明記。
- ・引用文は「」で出典・頁を明記。
- ・数字1字は全角、2字以上は半角。

例会の予定など

■ 例会の予定

- 1 日時 2月11日(日) 13:30~17:00
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第1集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
 - (1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
 - (2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
 - (3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
 - (4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
 - (5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会 3月11日、4月8日

■ 投稿締切り日 2月25日(日)厳守

■ 投稿先(編集担当：石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。

